

信仰即生活

輝しい新年はみ燈ゆらぐ聖座から明けてゆく。
声高く美しくみ仏の讃歌を朗誦いたしましょう。

一、巍々たる尊容輝きて 極なき威徳類なし

陽や月の影閉されて 摩尼珠の光ことごとく

隠れ蔽われ墨のごと 覚のみ声世に響き

威徳勝れて並びなく 深き念いは海の底

究め尽くして涯もなし

二、無明と欲と嗔りとは 世尊には長くましまさず

人の中にも雄々しかる 尊き威徳量りなし

功勲ひろく智慧ふかく 光の威相世に震う

われまた仏とならん時 聖なる王に齊しくて

人の世安く渡さんと 聖なる行を修めしめ

恐怖を懐く人ごとに 安けき道を与えなん

三、真砂の数のみ仏を 供養しまつらん願いより

道を求めて勇ましく 退かざるぞいともよき

数さえ知らぬ国々も 仏のひかり普くて

かかる精進のみ力と 威神の徳は限りなし

われみ仏とならんには 国土第一国たみは

いとも妙なる心もて 教の庭は世に超えん

国は涅槃の樂しさに 並びなき世とならしめん

哀れみ深き慈悲もて なべての人を救わなん

四、道を求めて集う人 心清らに悦びて

快樂とわに安らけし 希ひ願わくばみ仏よ

わが心証をみそなわせ 願いのままに励まなん

智慧さわりなき諸仏に 我が心行を知らしめん

たとえこの身は毒の中 苦悩の巷に立つとても

勤めて止まじ我が願い 忍んで永久に悔いざらん。

(日日聖典より)

花に満てる園を歩めば美しく

徳に香る者は善き生に樂しまん

美しき草、芳しき華は風に揺れて薫り

道に近づきて行える徳人は香にあふる

梅檀、蓮華の好き花も

徳に香れる華には如かじ
華の香りの微なりとも
徳は香りて空に満つ
道のほとりに咲く蓮華
池に香りて心地よや
迷いの世にも智は光り
聖者の徳の香るかな。

宗教のみが

昨年十一月に東京市に上つて行つた時のことである。十日上京したその日の夜、麻布区永坂町光照寺の十日会に招かれて講演をした。ここは東京でも特に知識階級がよく集る寺であり、院主は森慈海師とて信仰厚き人である。

この寺に行つて、その頃東京で名高くなつた「芽生えの床柱」を見た。見たというより拝んだ。拝んだと言つても、世のいわゆるお不思議としてでは毛頭ない。

この光照寺の境内に二十五年前に植えた二本の銀杏があるが、昭和四年十月同寺改築の際、邪魔になる一本の枝を落して、玄関の床柱にされたのであつた。それから四年目、昨年の九月になつて毎日の雨だつた、十三日、慈海師が薄暗い玄関の床柱に緑の点々がついているのを見出され、虫でもついているかと思われたが、よく見れば、緑の美しい芽が出かかつておるのであつた。子供でも生れて来たような騒ぎ、皆に可愛がられている間にその芽は伸んで美しい葉を出した。十月になつての雨にも芽を出して、とうとう十三、十四と殖えて、十七本になつた。

私はその銀杏の床柱の前に頭が下つた。根は切られ、枝も葉も落されて、淡暗い部屋の床柱にされて、満三年、上も枯れ、下も枯れても、その生き残つた部分から、湿度と温度が恵まれると、健気にも生き上つて行こうとする力、その生きんとする力が、この柔かな芽となり、葉となつたのである。

この銀杏を見た時、私は思った、人間の何というだらしなさであろうか。人が見てくれぬ、褒めた、貶した、氣に入らぬと、無明の疑惑に囚われて、真つすぐに生きのびてゆくことを忘れる。健気な銀杏の床柱に合掌したのはその背後におどる大いなるものに合掌したのだ。

枯れたはずの銀杏から躍り出づる力！ 悲観、厭世、絶望、疑惑、不平、自暴自棄、放逸、懈怠、等々の一切を蹴飛ばして、人間を人間として生かす力は何であるのか。これ即ち真実の宗教である。

尽十方無碍光如来の根本本態は涅槃である。法性法身である。滅度、無為、常樂、真如、一如等の言葉で言いあらわせるものである。この法性法身なくしては、願行に報いたる力の仏、即ち報身仏（阿弥陀仏）はあり得ない。十方無量の諸仏菩薩は皆この法身即ち真如より生まれるのである。

「法性法身によつて方便法身を出す、方便法身によつて法性法身を現わす。」

法身、真如には、色なく形なく香いなく、過去なく現在なく未来なく、東西南北なき、絶対である。平等にして常恒、久遠普遍広大なる大生命である。即ち仏教の眼目たる涅槃のさとりとは「法性の覺を開いて、長短、方円のかたちにもあらず、青、黄、赤、白、黒の色をもはなれる」ことである。この法性、真如をはなれては一切の仏法、仏も、法も、僧も、否、天地宇宙も、山川草木も、真理も、自覚も、一切はないのである。

一本の菊がある、色と香と形とをもった一本の菊である。それと寸分違わぬ造花の菊がある。一本の菊は生きてあり、造花は生きたとは言われない。何故であるか。一本の菊の背後には、眼に見えぬ、色と香と形を超えた菊があるからである。色と形とを超えているものであればこそ、色と形とを持つものを生かすことが出来るのである。万有を生みつつ万有に内在し、時間を超えつつ時間に生き、処を超えつつ一切処に生きる。この法身を自証することなくしては、釈迦もなく、阿弥陀仏もない。

この故に宗教のみが生きており、他の一切は生かされておる。

浄土の三種莊嚴二十九種を説く天親の宗教において、その三種莊嚴の本然態として（略相の浄土という）清浄一句を説き、更にそれを説明して「真実、智慧、無為、法身」という。真如のことであり、法性のことである。仏、国土、菩薩の三種莊嚴もこの法身なくしては生れないのである。

「真実！」人間の求むるたつた一つのもの！

それは、過古のものでもなく、現在のものでもなく、未来のものでもない。過古にも厳存し、現在に生き、尽未来際をつくして実在するものである。三世を超えて、三世に生きる。東でもなく、西でもなく、南北四維上下を超えて、一切処に普遍に生きる唯一の生命である。

真実は、甲のものでもなく、乙の専有物でもない。甲、乙、丙、丁を超えて、甲乙丙丁の上に生きるものである。

真実は普遍である。何時でも、何処でも、誰の上にも生きる普遍である。随つて、今（時）、ここで（所）、私の上（人）に生きて下さる生命である。

光照寺の床柱のみに力が生きておるのではない。

一歩足を踏み出せば、庭の樹木も、軒下の小草も、全ての樹はこの恵みに生きておるのである。何を見ても法界の神秘におどろけない人は、やむなく床柱の前に坐して初めて不思議な力に驚くべきである。しかし、それを多くは特殊のお不思議として迷信はするが、普通の平等の尊いものを拝もうとはしない。

樹は力のある限り芽を出せばいい。葉を茂らせて華を咲かせたらいい。だが人間は食物をとり、子供を生み、単に生存をつづけたばかりでは、生きたとは言われない。唯、真実が生きている時のみ、生きたと言われる。而して、

「真実とは如来であり、如来は真実である。」

すでに真実が欠けている以上、ほんとうに生きておるとは言い得ない。真実はそれ自体如来の本願となつて一切に生きる。

宗教とは、唯この真実である。

故に、宗教のみが生きており、一切は唯、生かされてゆく。

宗教とは唯、この如来の真実に生かされてゆく生活のことである。

すでにものの死活をにぎる真実をおいて宗教がないとすれば、宗教のみが真実であつて、他は全てそらごとたわごとである。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきにただ念仏のみぞまことにておはします。」

そらごとたわごとを転じて真実たらしめる、ただ如来の真実の生命のみ可能である。一切を生かすものはただ宗教である。

久遠の法身は願行のはたらきをもつて衆生の上に生きる。盡十方無碍光如来がそれである。この如来を我に於いて体解するものは智慧である。信心というも智慧である。智慧は、心の耳であり、心の眼である。智慧は、我等一切の迷妄を空じて、無限に広大に、如来を生かし、如来に帰命せしめる。

帰命は如来に向つて開かれたる眼である。しかし如来と衆生と言えば、そこに二つがあるようであるけれども、如来と衆生との一切の隔たりを打破して、不二体の妙4境を信樂せしめるもの即ちこの智慧である。

されば智慧は、衆生に於いて開かれても、衆生から開いたものではなくて、如来によつて開かれたるものである。更にその本源に遡れば、智慧は如来それ自身である。智慧は唯一仏の所有にあらず、一衆生の独占でなくして、一切諸仏、菩薩を成道せしむる法身自然の妙用より流出する平等の血潮である。

かの自ら一人を物知りと自惚れ、賢者と誇信し、才幹に高あがりして得々たる小智の「特賢」とは全く天地の差をもつものである。如来の智慧の広大は、天地をおおい、万有を徹貫し、一切衆生を乗せて無限に生かしむる平等力である。これ、大乘仏教においては、一切の菩薩を同一に普賢菩薩のみ名において「普賢大士の徳に遵い」と讃嘆する所以である。山川草木の青々たるは、ただ一木の特賢ではなくて、一切に普遍する相である。如来の智慧は、高慢なる一人の特賢者をつくらんがためでなくて、個人より人間へと、普遍の大道に往生せしめんがためである。普賢の行願に生きる人間を成就せんためである。

如来を見る者は衆生を見る。その眼即ち智慧である。世に何が至難だと言つても「我」自身の真実相を見ることほど難中の難はない。自己自身を照破する如来の智慧光なくしては、断じて自己の真相をつかむことは出来得ない。

ああ、又しても限りなく親鸞聖人を憶う。無戒名字の愚禿、浄土真宗に帰すれども真実の心は断じて有り難く、虚仮不実、蛇蝎奸詐、無慚無愧、悪性更にやめ難く、清浄の心更にあることなし。

如来智慧光の利剣動く所、寸毫微塵のあます所なく、煩惱底を照破し、自力疑心を粉碎して、無有出離之縁の無間底に落在せしめて、如来久遠の本願真実のみを生かしきりおわる。そこに寸分の主張すべき小我のはからいなく、ただ廻向成就されたる南無阿弥陀仏実在するのみ。

学において聖人にすぐれたる人もあつたであろう。持戒堅固において、行業において、修養において、優れたる人もあつたであろう。然るに何故ぞ、聖人の我にむかつて絶対の善知識の聖位を占めたもうは。他なし、如来の響流十方の智慧の名号、無辺に無限に輝きて絶対の聖化、靈化を聖人の上に拝することが出来るからである。

宗教のみ生きており、他は全て生かされてゆく。宗教のみ真実であつて、他はことごとくそらごとたわごとであるとの断案、決定は、聖人によつてはじめて我がものとなしたもうたのである。

聖人自証の告白、罪悪深重煩惱熾盛と聞いて、聖人よりも更に、罪悪深重煩惱熾盛なる我を諦観し、聖人の無慚無愧の悲歎を聞いて、我が内観の信証、蛙の面に水ほども感ぜぬ幾十倍の無慚無愧を凝視して、いよいよ如来の本誓を頂戴するばかりである。この幸は、無量億劫に粉骨碎身の報恩行に生きるも、これに及ばず、唯合掌念仏あるのみ。

大寂定

一念決定せられた南無阿弥陀仏の大信心は、人生のあらゆる生活相の中に生きぬいてゆく。宗教は不断着であつて、外出着ではない。平常不断、念々の生活が信仰である。かくすことなく、かくれることなき平常不断の、行住坐臥、妻と暮し、兄弟と居り、共に食ひ、共に働ひ、共に寝る。そのままが宗教である。

「吾等が色心二法（身と心）、三業（身と口と意の三業）、四威儀（行、住、坐、臥）すべて報仏の功德の至らぬ所なければ、南無の機と阿弥陀仏の片時も離るる事なければ、念々みな南無阿弥陀仏なり。されば出づる息、入る息も仏の功德を離るる時分なければ、みな南無阿弥陀仏の体なり。縛日羅冒地と言ひし人は常水観をなし、かば心に引かれて身も一つの池となりき。その法にそみぬれば色心二法それになりかえることなり。」（安心決定抄）

心も南無阿弥陀仏、身も南無阿弥陀仏、生活即ち念仏である。

南無阿弥陀仏即ち金剛の信心である。

生死動乱の波浪高くともこの信念に曇りなし。

苦悩の真唯中に焼かるとも、この信念に曇りなし。生活煩惱に曇るとも信念に曇りあるを許さず。

氷はいよく冷く、火はいよく熱し。

寒には寒を寒殺すべし。熱には熱を熱殺すべし。

寒、寒を知らず、熱、熱を知らず。
寒即ち我、熱即ち我。

寒になりおわり、熱になりおわる時、寒は寒を殺さず、熱は熱を焼かず。
寒を亡ぼすものは熱なり、熱を亡ぼすものは寒なり。

寒にいて熱を求め、熱にいて寒を求めて、これを幸福と錯覚すれば、寒は来つて熱を亡ぼし、熱は来つて寒を苦悩せしむ。

寒には寒になりきれ、寒、寒を亡ぼさず。
熱には熱になりきれ、熱、熱を苦しめず。

火は依然として熱し。氷は依然として冷たし。

我はこれ煩悩の団塊、煩悩は時によつて寒なり、時によつて熱なり。我と煩悩と二つにはあらず。我と煩悩と二つなりと誤信するが故に、寒に寒を追わんとし、熱に熱を去らしめんとするのだ。寒を追わんとするが故に、寒来つては我を食い、熱を去らしめんとするが故に、熱来たつて汝を焼く

肉食妻帯は地獄の業、祖聖、一切群生に同じて、敢ておしきつて肉食妻帯を断行したもう。南無阿弥陀仏。

仏心に生ききつて生死煩悩になりきる時、煩悩そのまま転じて真如一実の功德宝海に一味である。廃悪修善の人の如き、高慢邪見の人の吸うても見られぬ大菩薩道の野は、如来願力に生きて生死になりきり、煩悩になりきる人々のみ展開せられる。南無阿弥陀仏。

「当流安心の趣は、あながちにわが心の悪きをも、また妄念妄執のこころの起るをも、止めよというにも非ず。ただ商をもし、奉公をもせよ、猟漁をもせよ、かかるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬる我等如きのいたずらものを、助けんと誓いします弥陀如来の本願にてましますぞと深く信じて……」（御文章）

宗教に入ったと言え、生きた人生から逃避したことだと考える現代人の考え方。

宗教人になつたと言え「沈香もたかず屁もひらず」あきらめ主義の弱者になるのぞという誤解。

宗教を求めると言え、人間の老朽、敗惨者が、人生の戦いに疲れて自暴酒にかわる阿片を求めるのだと嘲笑する現代人。

その現代人が、かくの如く宗教を誤解しながら、その裏に如何に人生の根本に横わらねばならぬ唯一至高のものを失つてゆくか。時代の病根はここにある。

商売にいて商売になりきらず、漁をして漁になりきらず、教育者であつて教育者になりきらず……

そもそも人生にいて人生になりきらず、社会にいて社会と融けず、天地に居つて天地とその大を等しうせず、徒らなる享樂に走つて、今日一日の安逸をむさぼる、そこに何の意義ありや。

ああ。何故に念仏三昧の大寂定に生きて、真人生のよろこびを喜ばないか。

百尺竿頭不動人

百尺竿頭不動の人

雖然得入未為真

然く待人すと雖も未だ真となさず

百尺竿頭須進步

百尺竿頭須く歩を進むべし

十方世界是全身

十方世界是れ全身。

（招賢大師）

百尺竿頭一步の味、大愚に徹し、大悪になりきつて、一切の小智を超えよ。生死煩惱になりきる所、そこにはじめて浄土に遊ぶ不滅のよろこびがある。唯、南無阿弥陀仏の大信によつてのみ、よくここに到るのである。

「法然上人の御語に曰く、浄土をねがふ行人は病患をえて偏にこれを楽しむ、とこそ仰せられたり。然れども強ちに病患をよろこぶ心更に以つて起らず、浅ましき身なり。恥ずべし、悲しむべきものか。さりながら、予が安心の一途、一念発起平生業成の宗旨に於ては、今一定のあひだ仏恩報盡の称名は、行往坐臥に忘れざること間断なし。」
とは、凡夫位の聖者、蓮如上人の真面目である。

「病患をえて偏にこれを楽しむ。」とは凡夫にわからぬ聖者の心境である。「然れども強ちに病患をよろこぶ心更に以つて起らず、浅ましき身なり。」とは凡夫の真骨頂である。ここにおいておこるのは「予が安心の一途」、一念発起平生業成の大信心である。「今一定のあひだ仏恩報盡の称名は、行、住、坐、臥に忘れざること間断なき」不7断の信境である。

病患はもとより病患である。焦熱の苦悩そのものである。どうして病患そのものを楽しむことが出来よう。病患を楽しむにあらざして、病患を病患として苦しみつ、しかもこれにもさえられぬ念仏をよろこぶのである。これまだ不徹底である。苦患の底におちて、念仏、称名すら浮ぶひまなき大焦熱の苦悩に横たわつて、七転八倒、虚空をつかんで、病を病むに至ろうとも、そこに生きますのが、衆生に同じて撰取したもう法蔵の本願力である。そこに兔の毛、羊の毛ほどの不安、疑いあるべからず。仙涯和尚の「死にともないく」の説法、これを不徹底なる迷界に浮遊せる者の声と聞いてはならぬ。愚より賢、賢より更に大愚に、生死と一枚に大悟徹底せる大士の自然に、熱を熱殺し、寒を寒殺せる、百尺竿頭一步の絶唱である。

病の日には、病になれ。病む日に真に病になりきることこそ、大精進である。病む時、健康体の真似をし、病を敵として対立し、これを追いはらわんとすれば、病はますます我を苦しめるに至る。不平、煩悶、愚痴、無理、疑い、等々は、いよいよ病の味方となつて地獄を展開し来る。痛む手を抱いて、全身、痛む手に融合する時、痛む真唯中に大寂定がある。

ああ、病床すでに道場、観じ来れば人生のあらゆる生活相、全て宗教ならざるなく、大道ならざるはない。

衆禍、業障、全て転じて、絶対功德に一味なる、これを大乘菩薩道という。而して、南無阿弥陀仏はその真実易行の大道である。